

迎古夢旅 4700 : 地球のかおり 「山紫水明」 P119



～～状況と心模様～～

山水の美しい景色の形容に、**山紫水明**という言葉がある。

私の一生の中で、こんな光景に出遭えたのだから、何という幸せなことか。

紫という色彩は、高貴なイメージ。

今、住んでいるアトリエは、禅寺大徳寺の所領、京都の紫野。

広辞苑によれば、**山紫水明とは、**

日に映じて山は紫に、澄んだ水は、はっきり見える、とある。

まさにその通り。

中国桂林は、**山水画の世界。**

実は、白黒の山水画の世界しか、期待していなかった。**山は紫、は想定外。**

漓江下りは、訪問目的の広西チワン族自治区の東北部に位置する。

四方を山に囲まれた都市桂林から、陽朔までの川下り。カルスト地形による奇観、絶景の地。

山は紫、夢幻が現実となって眼前に出現。この感動はいかばかりか。

興奮を抑え、冷静に、冷静にと、言い聞かせた。

訪問した季節は、**2月**。かなり肌寒かった。ベストシーズンは4月から10月。

常にへそ曲がりなのか、人が行かない**時期**や行かない**場所**を選択。

自然は思い通りにはならない。しかし、ラッキー、スマイル、オン、ミー。

出会いの自然の色彩は、光と温度と空気によって、つくられると言っても、過言ではない。

なぜ、厳しい時期、**冬場**にこだわるのか。**光が美しく、透明感**がある。

だから、過酷なことも多い。夏場より冬場が美しい。

日本の富士山も同じ。地球が温められる前が、私の経験上では、一番美しいと思う。

遅くとも、**午前7時までの光にこだわる**のは、

空気の美しさと、光の美しさ、そして、光が、実にやわらかい。

夜明け前が、一番暗く、闇は深い。やがて、徐々に明るくなってくる夜明け。

この時間の経緯、この**瞬き**のために、すべてがあるように思える。

現場で、何が見られるかワクワクする。想像。この魅力から、もはや引き返せない。

～～漓江の状況～～

川は蛇行している。浪々と流れる漓江、急流もある。
自由に小舟を操れる流れの場所もあれば、流れに身をまかせ流れもある。
眼前に、絶壁が、迫るかと思えば、穏やかな流れもある。
尖った峰々の絶景が、微笑んでくれる瞬間、**それまでの苦労が一拳に吹っ飛ぶ。**
苦労の先に見える風景は、美しさが格別。これ実感。

小舟は二日前に約束。**現場には午前3時**に到着。
まったくの暗闇である。**焚き火**をしながら、暖をとる。ともかく、肌寒いところではない。
暖をとらないと、いたたまれない寒さ。若い船頭さん、吉林出身の若いガイドさん。
手を差し出し、温めながら、身を寄せて、火にあたる。目と目があう。
お互いの信頼感のような関係が出来ているのがわかる。
サポートしてくれたガイドさんが、通訳してくれた。彼なしにこの作品はない。感謝したい。

若い船頭さんも、正式ではないらしい。心からの気配りを感じた。
私の熱意も中途半端ではなかった。何度も通った。**危険承知で、協力**してくれた。
その上、出発前の船頭さんの気配りも、ありがたかった。
囲炉裏に鍋をかけ、麺を振舞ってくれたのである。心使いが何とも嬉しい。

まわりは、土の**地べた**である。底冷えもする。我が身だけではない。
若い船頭さんも寒いに違いない。鍋からあがる湯気。
ご馳走になった。麺は、五臓六腑にしみわたる美味しさ。こんな瞬間を味わえる幸せ。
健康であること、運が味方。念願のこの地に来られた幸せ。

こんな経過や下記の協力や「運」が重なって「山紫水明」の作品ができた。

今一つのこだわり。桂林から陽朔へ流れる漓江

川の両サイドには道がある。陽朔に3泊。別の日、レンタサイクルを借りて、単身、冒険。
漓江を眼下に、見られないか。ラッキーにも、ある場所との出会い。山頂へ挑戦。
厚かましさと、人なつっこさと、熱意のおかげで、思いが叶った。



いささかクレージーな所業だが、単身、文句を言う人もない、ひとり旅。
その前に、宿のフロントから、不確かだが、情報は得ていた。
地元の人との出会い。ジェスチャー、ボディランゲージ。行き方を、教えてもらった。
結果、くっきりとは行かなかったが、上記の画像記録が残った。